

日本生態学会関東地区会会報

第73号

目 次

特集1：日本生態学会関東地区会公開シンポジウム 「生態学×動物行動学の新たな展開：人為活動が動物の行動変化を 介して生態系機能・サービスにもたらす影響」 内田健太・曾我昌史	2
2024年度における地区会活動記録	7
2024年度会計報告	10

日本生態学会関東地区会発行
2025年3月25日

日本生態学会関東地区会公開シンポジウム 「生態学×動物行動学の新たな展開：人為活動が動物の行動変化を 介して生態系機能・サービスにもたらす影響」

企画者：内田健太¹・曾我昌史¹

¹ 東京大学

日時：2024年8月7日（水）13:00-17:00

会場：東京大学弥生講堂セイホクギャラリーおよびオンライン（zoom）

概要

生態系の機能やサービスを測ることは、生態系の保全や管理を行ううえで欠かせない。これまで生態学では、生息地や生物の数や分布の視点から生態系機能・サービスに関する研究が数多くなされてきたが、重要な要素が見過ごされてきた。それは、人為活動に対する動物の「行動変化」である。実際に最近の研究から、人間活動の変化（都市化や人口減少等）は様々な形で動物の行動を変化させ、潜在的に生態系のプロセスやそこから生み出されるサービス・ディスサービスに広範な影響を及ぼし得ることが分かってきた。例えば、送粉や種子散布、獣害問題は、特定の種や個体の行動に強く依存するため、こうした行動変化による影響を大きく受けやすいうだろう。にもかかわらず、このトピックに関する体系的な議論や実証研究は、これまで全くと言っていいほど行われてこなかった。本シンポジウムでは、国内外から多様なバックグランドを持つ第一線で活躍する研究者を招き、人為的な動物の行動変化が生態系サービスに及ぼす影響を議論した。

Abstract

Measuring ecosystem functions and services is essential for ecosystem conservation and management. While ecology has conducted a lot of studies on ecosystem functions and services from the perspective of habitat and the number and distribution of organisms, an important element has been overlooked, which is the "behavioral change" of animals in response to anthropogenic disturbance. The recent studies have shown that changes in human activities (e.g., urbanization and human population decline) can alter animal behavior in a variety of ways, potentially having a broad impact on ecosystem processes and the services and dis-services produced by them. For example, pollination, seed dispersal, and animal damage problems are highly dependent on the behavior of specific

species and individuals and would be highly susceptible to the effects of such behavioral changes. Despite this, there has been little or no systematic discussion or empirical research on this topic. In this symposium, we invited leading researchers from the USA and Japan with diverse backgrounds to discuss the effects of anthropogenic changes in animal behavior on ecosystem services.

講演者・演題

Speaker and title

Daniel Blumstein (カリフォルニア大学ロサンゼルス校)

Translational Behavioral Biology: Linking Antipredator Fear to Ecosystem Services in the Anthropocene

富田幹次 (高知大) Kanji Tomita (Kochi University)

Ecosystem consequences of animal behavior change: A case of brown bear digging for cicada nymphs

先崎理之 (北海道大学) Masayuki Senzaki (Hokkaido University)

Animal behavior in degraded sensory environments: implications for management of ecosystem services

稻垣亜希乃 (東京農工大学) Akino Inagaki (Tokyo University of Agriculture and Technology)

Human impact on vertebrate scavenging: What can the behavioral change of keystone scavengers bring?

片平浩孝 (麻布大学) Hirotaka Katahira (Azabu University)

Tangled misery: unexpected zoonotic diseases attributed to human activities

青田雄太郎 (東京大学) Yutaro Aota (The University of Tokyo)

Exploring the impact of animal behavior changes on human-nature interactions

久保雄広 (国立環研究所) Takahiro Kubo (National Institute for Environmental Studies)

Wildlife viewing: How can we maximize the economic benefits and minimize ecological impacts?』

内田健太 (東京大学) Kenta Uchida (The University of Tokyo)

Impact of wildlife's increased tolerance to humans on ecosystem services and disservices

コメンテーター：曾我昌史 (東京大学) Commentator: Masashi Soga (The University of Tokyo)

総合討論 General Discussion

当日の様子

本シンポジウムは、オンラインの同時開催で実施した。参加者は、合計 84 名（現地：25 名、オンライン：59 名）となり、国内外の大学教員と学生、コンサルなどの企業の会社員、一般財団法人など、幅広い方々の参加があった。本シンポジウムでは、Blumstein 博士をアメリカから招待したことに合わせ

て、進行と発表はすべて英語となつたが、シンポジウムを通して講演者と会場の間で活発な議論を行うことができた。講演者には、人為攪乱が進行する中での、多様な生物の多岐にわたる行動変と生態系サービスについて、実証研究のみならず、新たな研究のアイディアやコンセプトについて話題を提供して頂いた。質疑応答では、個々の研究への具体的な質問の他、生態系サービスの向上やディスサービスの軽減を目指した今後の管理に関する質問があがるなど、基礎と応用の両面における本テーマへの関心の高さを認識することができた。本シンポジウムを通じて、人間活動による動物の行動変化が生態系サービスに及ぼす影響を明らかにする研究の活発化に貢献することができれば幸いある。

2024年度における地区会活動記録

(1) 第45回関東地区生態学関係修士論文発表会
毎年恒例の修士論文発表会を下記のとおり開催した。

日時：2025年2月16日（日）
会場：東京大学柏キャンパス・大気海洋研究所講堂

実行委員：竹中浩貴（東京大学）、高井万葉（東京大学）、戸田達也（東京大学）、青田幸大（東京大学）、松本凌（東京海洋大学）、仲美凪（東京大学）
後援：日本生態学会関東地区会

【口頭発表演題】

富塚暖史(東京都立大学) mimic 種の進化がベイツ型擬態系の生態学的帰結に与える影響

安田晶南(弘前大学大学院) クロサンショウウオの卵嚢における透明から乳白色への進化はイモリの捕食圧によって生じたか？

長谷川隼也(東京大学) 三陸沿岸で繁殖するオオミズナギドリの採餌旅行に関する研究

安樂健太(東京大学) 3種共存域における種間競争からの解放がオショロコマ個体群に及ぼす生態学的影响

小幡愛(東京大学) 北海道における動的植生モデルを用いたササ類の分布、バイオマスの将来予測

杉本菖武(東京都立大学) 昆虫の移動分散を人間活動が促進する一都市域におけるヨツモンカメノコハムシの分散を例に－

鍵和田さくら(東邦大) 国内外外来種リュウキュウツヤハナムグリが在来ハナムグリに及ぼす影響の評価

朝鍋遙(東京大学) 絶滅が危惧される沿岸性ウミアメンボ類の保全ゲノミクス：限られた海流分散による高い遺伝的固有性

鎌田 真壽(東京大学) オニヒトデの嗅覚に着目したサンゴ認識・捕食行動における分子メカニズムの探索

兼祐翔(東京大学) クビワオオコウモリにおける生息地利用の個体差は年齢が影響しているのか? —エピジェネティッククロックによるアプローチ—
秋山礼(東京大学) 日本産ユビナガコウモリの系統地理~洞穴分布に注目して~

【ポスター発表演題】

滝山直人(東京海洋大学) ソメンヤドカリとベニヒモイソギンチャクの相利共生における宿主認知の可能性

菅野省吾(東京大学大学院) ビデオロガーを用いたアオウミガメ食性解析と腸内細菌の成長段階・地域間比較

福澤航生(東京大学大学院) 北海道知床半島におけるオショロコマ(*Salvelinus curilis*)とイワナ(*S. leucomaenis*)の浸透性交雑は適応度に違いをもたらすのか?

四宮七瀬(東京大学) 椎体の微量元素分析によるサクラマスの回遊履歴復元 ~"骨"の微量元素は生態解明の鍵となるか~

小山初菜(東京大学) 三陸沿岸に来遊するアカウミガメの回遊における年変動

本田真奈(玉川大学) 倒流木の形態による有機物滞留の違いが底生生物相に及ぼす影響

【招待講演者】

酒井理(東京農工大学) 動物の個性を理解する:その歴史と発達形成の観点から

Try to understand animal personality: through its history and developmental perspectives

(2) 2024年4月～2025年3月までの地区会活動リスト

- 1) 公開シンポジウムを1件開催した。詳細は、本号2ページから4ページまでの記事を参照してください。
- 2) 地区委員会・地区総会: 2025年3月4日(火)にオンライン(zoom)にて実施した。総会では、2025年事業計画、予算案を審議し、承認された。昨年度に提案されていた繰越金の使用用途として個人会員へのジャーナル(Ecol. Res.)のOA(オープンアクセス)費用の補助を執行することとした。
- 3) 第45回関東地区生態学関係修士論文発表会: 2025年2月16日(日)対面開催にて実施した。詳細は上記(1)の通り。

2024年度会計報告

2024年度決算(自2024年1月1日至2024年12月31日)

種別	項目	計	備考
収入	地区会費	¥0	
	地区還元金	¥466,545	
	その他	¥0	
	前年度繰越金	¥ 3,325,309	
	計	¥ 3,791,854	
支出	旅費・交通費	¥ 0	
	会議費・人件費	¥ 0	
	地区大会・講演会		
	会場費	¥ 61,500	
	アルバイト代	¥ 0	会場アルバイト
	講師料	¥ 264,364	講師旅費
	印刷費	¥ 0	
	修士論文発表会	¥ 69,290	
	その他	¥ 3,000	
	小計	¥ 398,154	
	会誌発行		
	印刷費	¥ 0	PDF自作/web掲載
	制作費	¥ 0	PDF自作/web掲載
	小計	¥ 0	
	事務費		
	雑費	¥ 0	
	銀行手数料	¥ 165	
	小計	¥ 165	
	2024年度に繰越	¥ 3,393,535	
	計	¥ 3,791,854	

日本生態学会関東地区会報 第73号

発行日 2025年3月25日

発行者 〒274-8510 千葉県船橋市三山2-2-1

東邦大学

理学部 内

日本生態学会関東地区会事務局